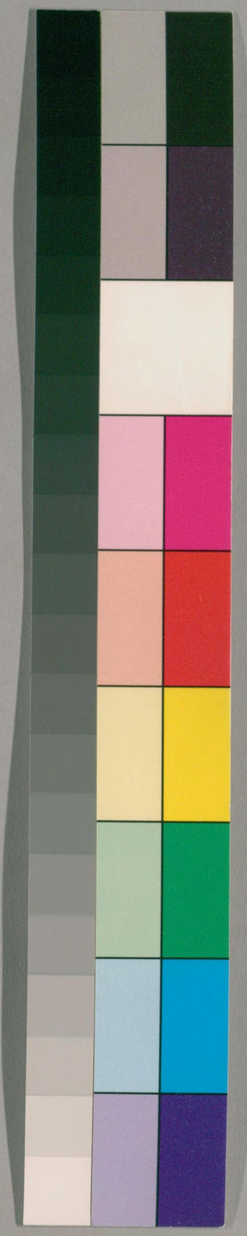
諸鳥定飼集　乾

859
25
取扱注意帳入



国立国会図書館　タイトル『諸鳥定飼集 2巻』 請求記号 859-25
ガラス使用

859-25

諸鳥定餌集

乾

帝國圖書館

国立国会図書館　タイトル『諸鳥定飼集 2巻』 請求記号 859-25

ガラス使用

鴛鴦　鴨類

一 池中又ハ餌入の上え並ニ河海又ハ干潟邊の内飼事よし

一 水鳥類ハ趣ある池中川なとに藻草飼事

是鳥のハ又ハ水よし

鵞鳥類

一 定餌　土鰌　ざこ

年中とし餌あり 其外 泥鰌よし

つみ丸　赤む　ちまぼ　おこ煮

但 鰻ハ[illegible]丸き大小ニ刻ミ用事し

一 定餌并菜水入ニ細ニ菜共宜餌之甚向キ

一 三日目一度程塩湯をわかしつかみかけはしらく
手飼ひて鳥の腰をさして洗ふへし 其羽根にも
かけ洗ふへし
一 日に一度宛生鰹魚の儘白焼にしてほぐし
に細に切りて一羽に鰹汁身引飼ひよし

鵜類

一 定飼黒米粟細に太年中定飼之其黒米粟
をまぜて飼之城中ハ大麦の寄よし又ハ遣ひ
川飼の上手置て飼太二尺の内一色日米一度
ツゝ飼ふよし

南京 ムクス 鵜類

一 定飼 赤やす 粟ゝ粉 黄麦
太定飼之城中に子梅ぼし飼ふてよしありまゝ
飼ふそして用ひよし

鶯 其外の類 五十雀類 小雀 小瑠璃 小鷹類 野鵐

蓮鳥 鴻鴨

一 太くのまゝでも定飼 赤やすき 城中七分
但しさし飼類小鷹類八に気其病あり 鴻鶴
に気あり赤瑠璃野鵐毎へハ足に気有り半有り
うつりかぬの白類 海老類このむ
ものゝ類 類ハ虫類ばかり飼ふもよし

みゝず好之又白せんまいにて汁ハ飼出して後に入
餌そへ飼へくよし又赤小豆粥野路ハ粥ぼうり
すりまぜ好之蓬来寺も見ゑ何る事あり
すり切　小すり切　せ川ら　壱ぜにちん
小ぜに　乏ぜに　小ぜに　平雀
魚ろ石　同細　但十代大喰ニも小も喰ニも
柳同白ニも云

一

右以定飼　鍾七分　擂鉢ハ八分但之
但小ぜにハ壱ちうにハ平雀ニハ胡桃一粒ニ二口宛入
飼之又小ぜにハ口蓋甚好ぬとのあり丸の位
よく籠ニ而浮生餌ニの喰のまぬ
よく喰ひすものハ擂鉢ニ而大飼ニよし

小すり切擂鉢ハ壱ぜにちん何れも粉まぜ
ちいぜうらふりもち好むけふるの蟋蟀むしずる
むしも好之朝け枯れ萌未るめへまぜ
吟ずるはしそよし

一

赤津子安まぜ　但小鳥ニも用る　赤鳥ニ用ゆ
薩摩まぜ　大かの鳥ニ用ん　白鶴まぜ　小鳥ニ用ん
右以定飼　鍾八分　擂鉢ハ両分但あり
但薩摩まぜハ何れも定飼の病出る事ばかりまぜる
内藤子安まぜるあり　も又はめもとも定まる
赤津子安まぜハいつれも　ハ鳥ニ好む也
餌に切飼候し朔ハ始ねどの之及びの

国立国会図書館　タイトル『諸鳥定飼集 2巻』 請求記号 859-25
ガラス使用

鳥ハいつれも吹ちらし入へし水　是可有之

一　大瑠璃　黄鳥　鶲ノ鳥
ヒイチイ　右名白ノ鳥

一　右何れも宝餌　鍾ハ　摺中ニ七分餌之
但大瑠璃ハ是気ある事なれとも口ハみつ〳〵き好む
ものなり

一　駒鳥　鴝駒　赤髭　雲雀　カウテンシ
百舌鳥　頬白　黒雀　まんじゆし　目白
宝舌

一　右何れも宝餌　青やニ　摺中ハ四分餌なり
但駒鳥類ハ何れも是気ある事なり　又駒類出ハ
別好候あるなり　駒類ハけしからす腹中ニ合

まゝ虫ん小やくハ餌値ならん事の事なり然ニ
志川の事へ巣飼へし赤まんじゆくハ出嫌
を好む也之赤一白舌鳥カウ天子ハ赤鳥同し
庭の雲雀なり　何れもよく読鳥の声似を
又百舌鳥カウ天子真似拍子あり　我好ハ茶さん
ごまを飼て赤目白鳴くし柿好なり
実気を宝ノ是し善く吹ちらの鳥之

一　右清れも宝餌　鍾六分　摺中ハ七分餌之
ひはせん雀　山雀　四十雀　せんなり
但雀類ハ兎角胡桃等之鳥一羽ニ入るゝ

一つの割かり虫ハ名餌を好む也あえ虫を飛ニ倍

帝國圖書

一　右之鳥とも啼のよし
此鳥ハ何れも冬春渡りよし　又郭公とおなじん斗
餌ハ粉餌　椒　粮　宜へし
但菊いたゝき斗ハ此類の鳥とハ飼付達ず

一　粟飼の分
頬白鳥　ましこ鳥　但しましこと云ふあり
のじこ鳥　きくん鵐　但し琉球鵐あり
あをじん　大あをじん　頭高　深山頬白
松むし　但しやまことも云ふ
一　右定飼　すりゑ　鶸之中ハ粟飼あり
但此鳥ハ何れも粟すりゑ粟喰ひ候鳥まれ

杭子不宜時ハ粟飼へし　右ハ何れもつよき鳥なり

一　荏胡麻飼の分
まひは　からひわ　鶸之
但紅ひわと云
ましこ鳥　河鳥　若か宜　但大ましこと云ふ
うそ鳥　しめ　まめ廻し鳥

一　右定飼　すりゑ
鶸之中ハ　粟飼之
但杭子何も荏胡麻飼宜し又粟飼ふよし
麻の実飼ふよし　当時ハつよき鳥なり　ニ
大かたハ足気の病有り
ほうじろ鳥　大むく　鵯　椋鳥　鶸むく

一
のげ寄　尾長　鵆名寄　首玉鳥
きう寛　珊瑚鳥　珊瑚鶯　鳫春
きく鳥 但八哥鳥とも云之　黒尾大切之　鳫く鳥
白尾大切之　風きき之　餌やうきん　小むく

一 右何れも定餌　きやう鳥　越中黒鳥餌之
但 津くミ之類也ハ別ニありて也好物之 但しし餌之
亦むく鳥類ハ虫類を好物ハ摘かゆ末こし
南天のミを好又蝋もよし 別ニあり好也蝋もよし
ハ足の病気年ゆゑり

川蝉鳥

一 目高小鮒定餌 但魚中生餌ニて飼なり

右定餌の秘書ハ口伝也書のまゝあり
有此書ハ定餌の目当ニ々鳥の部分段々
書あり 然よりし口伝ニ定餌の書別ニ一冊
年中ニ当テ用ル鳥の餌其始終をよく部分
しるす書なり

一 年中飼様部分之書
小鷺　鶯　ひこ鳥　大瑠璃　相思鳥
ヒタキ鳥　ヒラニ鳥

一 右何もそれぞれ当り所
但此記ス鳥ハ餌稽りげ（かうゑんよし）ます
ひ進しもむ違ひ塩出して寄

一
小瑠璃　野駒　蓮雀　鶺鴒類
駒鳥　赤髭　鳴駒　白雲雀
ヒニスイ

一
右何連も籠ニ飼
但餌けん営おと何連ても同じよくよし
時鳥　筒鳥　家鳥　じひしん
佛法そう　かつこう　大吉良
小吉良

一
右何まて同断
但餌ハふく擂飼無角へ付くとき猶ふ
菊戴き　ちどめ　せんまう　しばちどり

小よし切　目細　目白類

一
右何連も同断
但餌摺かへん屋ゟかるミて飼又は
郎の鳥先生病気なし
朝鮮むく　唐春　鴫鴨　唐かく鳥
きうかん　長嘴　白鸚　かごう鳥
白尾天竺　黄鳥　白八哥鳥　黒尾天竺
小むく　八哥鳥　鴿むく

一
右何まて同断
但此鳥類何連ても無角へ餌の升を餌ふ
なかまくねり飼何連ても猪鳥なす利

一 黄庵きん　健きん　唐きん
首玉鳥　鴿子鳥　かわ子鳥
厚舌 但此鳥も足気あり手いり　白鳥 但此手の金鳩あり　尾長鳥
珊瑚鳥　珊瑚鳥

一 右何れも同断
但病なく候ハヽ餌ハすり餌之又ハ粟数ハ肉の餌
しる時ハ小鳥の肉を細かくして与ふへし
淡よ鶉　大かく　猿鶴　まゝ白　奴急 とらとく

一 右いつれも同断
但病気なく　つよき餌之故むしろ生気
ある事あり

之光鳥　珊雀 ヒイチイ　深山鶺鴒
もんどり　四十雀　慈鳥　大よしきり

一 右何れも同断
但此鳥ハ口気の病ある事ハ只ハ餌の度
ある事あり

雲雀　かうてん子　百舌鳥　菊いたゝき　朱雲雀

一 右何れも同断
但病ハ同気口気足気ある事あり
黒雀　五十雀　ひたき雀　こがら　小雀
山雀　えなが

一 右何れも同断

但此類嫌性形ニ而病気ニ重キ事なり
未熟之者ハ
青弟ら　青弟ら　黒弟ら　小弟ら
大あお背い　小あお背い

一 右何れも同断
但此類足氣又ハ目気ニ懸ル事なり
百舌鳥類　何百舌も同断
但百舌ハ内鶉百舌鳥ハよりしる重気を防べし

一 然る定飼の書ニて粟飼ニ致の鳥并ニ虫飼の致の鳥ハ是ニ而病氣なく強ものニ而定飼の外ニ候なし
鷽のこ　鵐頬白　鵐あおじ　珠雀鳥
珠かわ鳥　ましこ類　八頭雀　頭高
右いつれも粟飼之諸事頬白類と同断

一 岩雀足氣ニ成是ハ患ゴ而定飼ハ諸事右之類と飼掛同断
年中飼掛類分之書様
右之定飼ニ而年中ニ而為候ゆへ書様

鶉

一 定飼舂稗　水入共
右年中定飼之品水入ニ而細菜年中日々ニ飼申へし
但ぼまんハ篭之内へ二つゝ宛入日々飼

一 鶉持やうじハ五日ニ一度程替へし

一 稗百合許ニ水雑て一律ニ混入て相なり
多分ハ入置ハ何れも宜

一 菱ハ魚ニ二度ほとて仍の虫へて及ハ何てハ可
日毎刻ニ用也

一 毎朝東ニて二分時分早朝小二尺量掛置ねの
ごく日なたよし

一 肉も又落様子ニ候ハ時々餌前ニ付ちニ拵餌
十四五寸飼

一 夜ハほんぢり入室暖なる所よく土蔵を置ても
およろし

但天気よく成ハぼんぼりの日当り候日向ニ
出し置時分までも日ニ当る事よし

一 鶉ハ油足り安キ鳥故粉稗の外用る事ハ何も宜
きちをみせ切の類も飼る時ハ何も宜

一 鶯ニ泰患ニ為る類落用ニ候ハ油気など切ニハ焦紀
何ニ文程の稗斗飼ふてハ肉など落候ものハ何の類
也春稗を用ひ正味斗なる故肉落る

中風 并似病 語り病

一 右根の病ハ立ぐるまの之是ハ油足る迚てたぐるなど触ず
鶯肥たる筋違へるものニ而中風病ハ肉のまゝ
風の当りニて寒く掛るものニ

女鶚の事

一
よしとす
沖の黒より出生致旨申候
毛並羽色よろしく一種の鳥ニて言語ニ絶し申
事ニ候其後ハ鳥を押へ尾羽なとの不吝節
通り首筋迄肩へ鍵ニ通ひ是ニ嘴を出し
右之通ニ沖縄ゟ参候沖縄ニ而ハ蔓草ニ付ず
つん毎ゟ取是を場を剃刀ニて開き取らずるより
薬法并切付候てかく沖縄ハ其後ハ消魚なく
金箔を取り針ニ而糸を縫之を縫候ハ白玉を
とる
但此金箔ニ而音絶すり日向の道二ヶ所出候
右ハ初ニ而有説なり

一 沖縄ゟ出来る鳥ハ常ニ身をかくし尾を伺文ばかり
大根葉細く刻て飼ふよし
一 喰物ハ猪の肉を籠へ移し喰せし御座候ハ
一 夜ハ籠ニ入置鳥の為ニ宜し
一 常ニ水を能吸鶉ハ服用甚ニ致之甚以宜しく候
摺餌ニ候べし
一 初ハ虫ニて繋く其日より喰を開キ候ものなり
一 七八日ゟ摺餌ニ候べし

鶉飼方の事

女鳥を男鳥の側へ入其後ニて菌と雷て候
妻鳥ハ二三日過て後ハ卵子咲から育ル 雛鳥ハ

一 ご飯細く茹て中頃なり麦合婦男身と此合自然と
噛くさ別して其上より餌と粉にまぜ女なくに与べ退くし
あたへ申事

鶉之書写候

和漢諸鳥飼喰書

并粉ぬかし拵様

一 并をほし候くるみ丸ぬかまざる粃粉をよく色稗を
まめとりの成るは片まぜ何とも色并と一斤よ石臼
にてよくすり細き篩をとおして細にすべし

但ぬかし稗をまぜるの割にてぬかし
宜細而あるし諸鳥に用ゆべし文の如ゆくて

一 諸鳥によき其菜の粃粉合交のこなしを用
ぬかし居子心をよみ合し青菜の好事なる鳥の為によろし

一 不用なり文米黒く色の液る人ある薬になる
并草がちあらば鳥の関係なり

一 粃粉鳥の腹中を透す為なる気なき事ともあるものも
能きの是を書其のかまわんよふし記する也婦女なく形ある候
よ見る様にて書を以て之

但黒米麦合粃粉の粉ぬかは諸鳥によし
用る之宜事

一 飼干絵之事
細文作事飼の時帝を以て五つ度炭火にて焼粃色之

国立国会図書館　タイトル『諸鳥定飼集 2巻』 請求記号 859-25

ガラス使用

一 まこもの葉は大根の葉のごとく切餌なり是もよく合な
るゆへ時々はきざみ入るべし

一 常持之もまこもの葉がいなりし此草の葉を刻て餌に摺
入る時(暑気)暑中ばかり餌を出してもよろしく

但常まで摺餌は暑中は鶯の餌には少々加へ
又当摺餌を仕立べし

一 下餌之事

常の餌といふは下餌ばかり米の粉計の事なり
常の餌の下にては下餌ばかりにて米の粉計の事也其余は
是によるべし

諸鳥合粉仕方

一 石までも摺餌にて其鳥々の宜餌を掛合もちゆる也
摺餌は諸鳥ともにして摺餌ばかり也

但常(常)に合せ粉にて飼鳥の為に別にせずとも
是は道中など取急き候時の事なり又大事
物の世話は甚面倒する事なり

一 白大豆の粉

白大豆の粉は摺餌の諸鳥肉付よき粉の時に
大豆の粉をよくいりてよく肉付するなり

但常の粉とよく云ふ大豆粉いふ事よし
鳥角ともと云割合よし肉付也
いま但大豆の粉焦(こがし)へ交合せ甚諸鳥へよし

飼ふ事よし

一 諸鳥薬之事

一 惣体の病気薬ハ腹中の虫気取丸なり 是故ハ
世来なり　鶉伝 甘草

右二味細末にし 事ある時のハ 二三 用ゆ

一 薬用ひなる悪し 其時ハ鳥様子不覚と見ゆべし

亦其時ハ生餌ハ 腹ニ宜敷所で 壱六ケ度

あり鳥は能薬并不覚事 相しるる事なり

無様事之

一 諸鳥それの事 驚きたる時ハ薬茶色之似たるの出で 驚き候鳥を

飼鳥に 気 鳥の驚き飼鳥の ハ

鳥まとふ胡麻の油足よりは 一 極

其も飼と　其中の胡麻 ハ 油

一 療治なる所の 亦薩摩の生血用ひ

一 薬ハ心を付見べし 諸鳥

薬 其外薬ハ 腹中 ならざるべし

其用ゐべし 其外

諸鳥肉合見様

一 肉形なる鳥を 様 肉の 鳥を手拭

よくおさへ 腹の毛を吹て見るべし 肉形

ハ 腹の 肉合能 腹

諸鳥 捕子吾 見様

諸鳥定飼集

国立国会図書館　タイトル『諸鳥定飼集 2巻』 請求記号 859-25

ガラス使用

一

一

一

一

国立国会図書館　タイトル『諸鳥定飼集 2巻』 請求記号 859-25

ガラス使用

一 水にひたすが減の事

一 諸鳥足を水にてぬらす事ハことに悪しきなるべし其内
相裏鶉抔なるハ二足ながら寒くふるひ恐るべし
一 水にひたせし籠へ泊木をかへ湿気ある所におかれ
ほと事有りし鳥のやうすなどひだる鳥のしるしなれば
かし出長徒然し此方より水をかける事何にても
津の飼鳥ハいづれもあびる事嫌ひ
なるものなり
一 若し鳥水をあびるハ根事もなきハ出すべく
あるべし其内也是ハ東地へ出し人の様にて
いつも丸を吹つけて東方ものなり

一 呑水仕やうし
呑水ハ鳥をも外籠へ移し籠をもちかへ置べし
日向へおいて置よくほして呑水を入番のごとく
鳥へ呑ますべし
但呑水斗ハ相裏鶉其外鳥多く用る事の廣
あり蓋懸用ゆべし赤多あるいは
よく用ゆべし
一 飼方の鳥 唐根
諸鳥ともに籠打出鳥ハ水ふく毛
ものかへ蓋よく形を乗出し全体
なり暑気の時ハ同じ一日水呑値

一

根食ひするものあり

但菜ハ菜漬ニ書あらし　此菜ハ別種の方

胡ケの油の内にひ葉て功能あり　お気れて

其用ゆて益あり

一

赤毛　駒鳥　鸚鵡鳥　小瑠璃　藪雀よ

大体の鳥や足ぶるひ(?)といふ

ものの鳥此病ひおこる事あり　又足気おこる時

ハ鳥常に足を気にする事のあり　此時ハ籠の下ノ子を

よく洗ひ　気をよく干して籠鳥を洗ひ

病ひと好むあり

但足気おこる鳥ハ足ぶみあびせへしも健

実相の書のごとくなるべく御座し　又かがい

ならし候て鳥の法るべき足気おこる病のあり

一

足気おこる鳥療治方

法あしをまづ山椒ハおるがる程をいわしかい減ずるべし

鳥足一度つけ此後ハおなく足へぬり　又種ゝ松葉の

枝を入足をおりて生鳥を洗ひ　よく此後おなし

一

但一体の鳥弱成る鳥ハ足気の療治ハ

難しき鳥の療治の足気ハ鳥の骨より

余ハ別品なるものあり　おまけに

鳥をつかみ　爪をつけ　傷つけられ事

一 口氣之病　よし妙なり
鴻記よ　大瑠璃　記まつ類　三光鳥
深山鶲鶺　小鷺
右之類ハ病療治方の書芙蓉ニあり又都ニ而も
付紙有之
但口氣かる鳥ハ類ニハ必一絹を附分細ニ書也
右口氣ハ虫薬の気ニ繋る芙蓉ニ有し
飼く処等又息気ますよし
一 筋氣の病
鶴ニ有り筋氣坐ハ首をかけて見せる也
右ハ芙蓉ニ薬病ニ用る
一 鼻氣の病
鷺　鶏
右鳥ニあり右稀ニかゝる虫之外ニハ無し
一 咽氣
かふらん　金鶏　孔雀　白鷴　高麗
右鳥虫も薬病薬を用
但此病ひ多く右丸是ち頃ニ有
一 羽毛之事
羽毛しかる鳥ハ鷄類　金鶏　孔雀　白鷴
かふらん　雉子類　鶴

国立国会図書館　タイトル『諸鳥定飼集 2巻』 請求記号 859-25
ガラス使用

一 小鳥ハ飛角ニ籠の鳥ともに大事ニ御座候 鳥類ハ
何れも其の身ニ有り庭鳥ニ寄り鳥羽虫わき申候
庭鳥ニハ大事ニ候得ども鳥ニハ鳥の書籍の通り可有之候
是ニ付其羽虫なり申之候 依而月々ニハ籠をかへ候
二三日ニ一度替へし 羽虫出来

但此羽虫の葉色くろし 次第ニ近寄り申候ニ付 籠の
籠をせんじ 右之洗ひ申候 又葉ニて
掃除致候へば羽虫も取れ申候 又ハ御座候ハヽ
候へし

庭籠掃除之事

籠をはじめ是ハ竹箱抔の鳥の類ハ何れも其の儘
手をかけ置べし 又年中庭籠へ入置鳥なりとも
一ケ月ニ両度程ツヽ掃除すべし 羽虫も出来申候
之らハ鳥をはなし 外の籠へうつし其外の庭籠へ入れ
置べし

鵯の病

雲雀　山雀

右之鳥類ハ何れも本(?)ひんけん相口鳥ニ同様ニ
御座候 其外何れも羽虫ニ付病ニなり
其方の毛 鵯の病ニ候 間の豆へ入(?) 是ニて洗之
但此病ニ而方先鳥を捕へ尾ニ諸方ニ
いかのごとくなる物の如く是を一定として出

声中をかけたる松葉を入る此所痛挟あり
穴を明て風をあたるなり其鳥を尋ねくと
ふぐく誤て言ふ風あ乾なりて又泊剤
割法甘草　三分　黄金丹　二分
右二味茶碗ニ入練りてよく乾して用也
一 諸鳥目あしく成たる薬法之事
粉茶にても　焼めうばん少し
右二味茶わんて利申る薬を搾る右茶を紙
よりて付て鳥ニ此目の内へ茶の汁を少々落すなり
右のごとく一日ニ両度の内ハ日に一度つゝ落すへし
一 まづ目ニ悪ひり鳥ニハ少し熊の膽を加へし　最

一 鹿しもあり
大鳥類疫病煩ハ大根の葉を擂て摺り合て目を
あらふ事
化此病ハ池から出る時ハ足気ニ川原之
時鳥を押へむせんとやれ共かなはさる黄色之
鳥の時ハ合を法から鳥を足　はやり記
ばんしたまへ多がはるべし
一 泊梨木
揚慈木
一 梅骨木
右二品を諸鳥に用也
一 諸鳥泊り木二ツ間拵ニ寄ハある気の鳥カ赤ハ細く

国立国会図書館　タイトル『諸鳥定飼集 2巻』 請求記号 859-25

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『諸鳥定飼集 2巻』 請求記号 859-25

ガラス使用

同薬法

大黄　三分　鬱金草斗　二分

右三味細末にし粟の粉へ入餌に交薬の分量

時々用申

一　水薬之事

諸鳥水を呑ときにはかる時を限合呑の薬液交はう

又若又常に鳥の薬液にて鍋合にいれ米と服べし

其勢門を

せき出り

右三味細抹にし鳥の粉へ入鳥の水に交へ

用申

一　諸鳥ともに薬の通し遠ざかる時は水をかはらしむるの益べし

一　飼方かはし八諸鳥の飴中を煮かし久置之

水は新に鳥の用に飼べし是薬を用時ハ必

鳥ともに春より諸鳥を引摺餌斗置

一　二三日飼ハ薬なるなり

雑類

一　鳥籠漆塗之合羽鳥の下地とかはらしめ申べし

一　小鳥諸鳥共に爪延たる時は杉なと用る之鳥の餌

掻くをしみ出るくあらし爪先を切り置べし羽し

安し出あらはせんかくふなを針血など取へ掻付れハ

且利血薬もあり

一 諸鳥共に籠をはなし能く遊はせ足気を扱
わか鳥ハ別而日にあて暖め足気不弱やうにすへし
籠をはなし候へハ足氣よくなるなり

一 籠の内へ土なと入置事なし下にも板を能く
洗ひ泊木も能く洗ひ干て又鳥を入るゝ時分ゆるく
籠に気なき様に仕掛能く乾かし又籠の底板を
出し後の上にて能く洗ひ水を能く乾し了て後鳥を
移し候へハ鳥湿気をうける事なし
但冬ハ雨降の時分ハ成る丈日中に干用へし
も湿気ハ鳥に大きに障る故よく毒を避へきなり

何鳥も病有鳥ハ少し高き所に掛置へし

一 ほまれ

一 ほまれとてハ餌壺の粉を越る粒餌の落る事あり
少しも用ひ毛をあらし書後ろ水のよく
悪しくあり

一 蚕餌用る事小鳥ハ一羽に蚕餌一疋の割に而三日に壱度
の鳥ならハ一羽に蚕餌二疋位の割にてよし

一 生き虫ハ蛇も捉へ羽を去り用ひ方餌の上に置てよく又
擂りて与ふる也

一 ぼうふら虫ハ能く洗ひて餌の上に置

但ぼうふら黒ぼうふら斗用赤きハ不用なり

国立国会図書館　タイトル『諸鳥定飼集 2巻』 請求記号 859-25

ガラス使用

あぐらなどハ波羅与の如く上つまらぬ鳥ゆゑ
飼候て中にて分段横の如くにて異なる事由

諸鳥庭籠合揚様

籠に入る鳥ハ羽を切らず籠を押へ入る也其様にて可有
出用ニ致時可申事

諸鳥生きにて、鳥を中に分て餌を入れて何も同じ飼合
すり餌のかひにて用ゐる事、又飼合の時分ハ鳥を見て
一 鶏ニ生ル鳥ハ生餌ニ之を合せて其鳥の好む餌
飼ふべし 鳥生きハ鶯などハ芝などに付て
蜘蛛なども飼ふべし 杜鵑 鶴鶉 鴨 鶺鴒など
大ちがハ 鵜鷺 此類の鳥ハ別にすれハ二つハ程中ニ別ハ一つ

飼ふべし 右細く刻み餌の前に並べて飼ふなり
一 黄鶲類ハ生虫を刻み菜の葉を飼合しすりみ
刻ハ芹を切り細かに切りて飼菜でも宜しく
切り様細かに切り飼なり
一 鶫すりみ類ハ生餌を飼へし 右飼様何ニても同じ
一 百舌鳥類ハ雀の肉 生きたる雀を用ひ生たる雀の
いまだ血をくべし
一 頬白類ハ粟稗飼ひ 右すり餌ハ少し青味入れ申す
一 豆ころ類ハ麻の実飼 右ハ青み入れる
一 鶍類ハ実餌を飼 白類ハ粟黍 右ハ麻の実
右出で同じ如く 粒餌の鳥類様子何にても飼合宜

国立国会図書館　タイトル『諸鳥定飼集 2巻』 請求記号 859-25
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『諸鳥定飼集 2巻』 請求記号 859-25

ガラス使用

但ちやぼとても鳥のあしの迯むくるも
あれ候あり

一　飼雛の事

諸鳥子飼を乳迄させて暗中にて飼を養ふ事有り
ありにいむし　を留飼の窓にして飼ふをしみ生
ふらし夕日影は冬へ入るをくをし左り次候ふ
海るえまゝ風の当らぬ処へ置事よし

但飼されする鳥類は　ちんどやく大瑠璃
鷽類　駒鳥類　三光　右三類の鳥は何れも
暑の時に事なふり飼おされする事まで有之

一　唐鳥の事

一　唐鳥類　和鳥とは違ひ甚つよきものにて飼の外に
操うあり　寒時分も飼ふけは候ふ　又若ら病気
生れは悪葉を用ゆる事なり

但珊瑚ニイチイは唐鳥の内よりは別て
寒気ニ痛事あり

一　和鳥乃事

和鳥は悪くは鳴鳥にて　唐鳥類とは違ひ弱きなる
ものなり　和鳥の内にても別て飼能はつく事鳥を
作るは此方の籠戴き時鳥類は囲ひよし　一切
鶯此類ぼく飼方も難く其鳥類なり大抵此類の
飼方は候ふ人にかひ和鳥とも前ほう白類まつ類

一 都而諸鳥とも定餌合の摺餌一様ニ而定餌の外によ
ろしき餌あり

和鳥之大抵並餌

一 ほゞろ 小るり 目ぼそ 蒿雀 三光鳥
時鳥

右は摺餌菜葉汁しぼり餌ハ暑気ヲ防べし

一 唐鳥餌之大抵並餌ニ而定餌の事

いんこ類の種 鸚鵡類種 文鳥 十姉 紅雀
金絲家 むしがら 九官鳥 ぶんちやうくまんちやうも
いんこせう 玉じやく 右之鳥餌同断ニ而も別しく
暑気ハ二而る 紫ハつるや 紅雀 長生鳴 含鳴

なり 暑気ハ別而暑気を防べし 当時並餌之唐鳥迄も
右の外鳥ハ当時並餌ハおよそハ書

但和鳥唐鳥共ニ当時並餌の鳥も粒・粟稗
別而暑気を防へし 又当時並粉出来を用る
事ハなし 雄鳥の尾へ大抵とあし
多ぜん 二ツ三ツ程宛とし

一 右之唐鳥餌ハ暑気防のため並餌の内の稗・荏
中物の液料粉糠とかふ 暑を防の為によし 夏
五月より又鳥ハ十姉妹鳥餌の小鳥ハ常に菜葉を
草鞋作り籠の蓋へ掛置べし 尤も暑気ハ
たとへ防ぎ少ニ一ツなり

いんこ類飼様

一 白いんこ　青いんこ　何れも

右之類定飼　黍　稗　蕎麦又菜の葉

一 二三日ニ壱度程雨ふりの種を飼置し　猶[illegible]

多く与ふへし　然共　少も能なし

赤毛青頭の分

一 緋いんこ　黄色青頭　七色青頭　何れも

此類のいんこハ擂餌なり　都而赤毛のいんこに准し

擂餌ニて　飼と心得へし　[illegible]

ハ擂餌なり

一 右赤毛の青頭類定飼餌なくハ米の粉　青菜を

青み入之　何れも日本鳥類の如く少し[illegible]と煉て飼へし

但粒飼の鳥青頭類ハ[illegible]の[illegible]

用ゆ　擂餌のいんこ類を[illegible]此類様子ニ何れも時を

[illegible]

用ゆ又[illegible]

[illegible]

飼へし

和漢鳩類定飼の書

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一 粟ニて白と黍と等分ニ交て飼ふ事なし 摺餌も
入て定飼になす也 右粟ニて白米ニても 此ハ合鳩を
斗鳩不といふ別の所を用ひて宜しき事を心得べし
又斑鳩 秧鶏 茶説鳩なんどの鳩ハ 鳩とも其の内にも
別の所の鳥に黍斗にて飼ふへし 生き青鳩を
小豆を粉にむしひのばし 又みそ飼へし
一 挽割蕎麦ハ 粉鳩 烏 肉掠り日 掠子ばかり也
廿日飼ひ 別に別るへし
一 挽割蕎麦 鳩類 紅雀 金鶏 定飼ニ合て
用ひよし 尤掩飼の鳥 鳩なんどハ不用
同掩飼唐鳥の部

一 文鳥 十姉妹 かなありや 紅雀 其外にて
鸚哥鳥 ぶんちやう きんかちやう 此ハ多く候
一 黍粉合入候 年中の定飼也 其日にこぼれハ捨
上へ出候所ニ洗ひ 文また合ニ菜調し可
見飼
但黍を外ならハ粉ハ各割ニ交飼へし
右肉なとこね摺ひ入て此ハ稗なら飼々
多く交飼摺ちりて甲ある定飼ニ
直すへし
一 粟にて白 黒米 粉
右ハ和漢の惣飼の法なり 肉ニ飼よし

国立国会図書館　タイトル『諸鳥定飼集 2巻』 請求記号 859-25
ガラス使用

一 元気なき鳥ハいつとも常多く飼ハ御為とても不同なる
様子ハ気ありて心得べし

一 孔雀　白鷴　金鶏　雉子類
　右ハ　せんかん　かゝん

一 定餌黍黒米も搗て粃抜萬葉とかし粉太
定飼なりむかへ入合塩之まぜて日々飼へし　黍
右拵ハ其合の割ニ交合へし　粉之同へ交る方取
略し不飼べし
　但し此餌斗ニて飼鳥の為ならし
　食の時ニ二三の鳥を並みて日々飼へし

一 孔雀斗ハ雉へ仕切を拵て粒餌を一色にて入合なり

一 孔雀ハ餌ニ何も来る鳥なり
　孔雀の子飼之

一 右鳥雛子飼様何れも孔雀同前之すり餌用ゆへし
すり餌の上え黒ぼう豆交合せ飼事之　若子ハ
先ハ十月比迄ハすり餌斗飼るなり

一 十月比から粒餌を飼なれば擂餌も飼なり

一 若子の内ハ虫類両餌ニ十数て日々飼べし　尤常
もしハ合用あり虫類の外ニも若子の内用ゆ也
親鳥ニ成ても病ある時ハ甚嫌ふことなり
尤二歳よりハ常ニもしハ用ゆへし

一 白鷴　錦鶏　雉子　うらん　しやくい

せいらん

一 右何れも孔雀の子と飼様同前之

　但飼餌拵様の事

一 飯を餌にいたし候ハヽ又かの摺餌のごとく拵て扱
　をり小米黍二品入青菜細てまぜ合せ　餌の
　ほうりと青み抜に拵て飼べし

一 右ほ飼餌喰兼候ハヽ二三日も右の餌を少ツヽ飼候ハヽ
　喰ものにあらず交て飼べしよし

一 孔雀　白鶏
　右両鳥ハ年中日ニ両度ツヽ十三足程と飼べし尤
　地中にて同前なり又地中冬抔なれハ十四五足程て飼
　ふし蒸餌飼時ハ青みハ前後日ニ一度なと
　羽ひろげ青みハ百日ニ一度程と飼べし

一 青みにて両三度庭の籠へ入おく時ハ雛子すくなし
　但し青みの内ハ右のごとく日ニ両度ツヽ飼
　尤雛の折ハ生餌之内ニ養ひ候へ共雛ハ
　喰候ハヽ蒸餌にても飼べし孔雀の子を
　同前なり

一 孔雀の子　白鶏の外とも年中とも両度ツヽ飼候事
　二三ニ一度程なと少く与へ候而も
　右餌の時分ニ日ニ両度ツヽ三足程て飼べし

一 右両鳥大鳥なれハ青みと何也青みヽ飼之

一 並籠の鳥籠ハ〔判読不能〕少く〔判読不能〕し諸鳥籠ハ
の〔判読不能〕七寸〔判読不能〕籠ハ七〔判読不能〕
但並籠〔判読不能〕
〔判読不能〕飼〔判読不能〕
一 常ニ籠〔判読不能〕
飼〔判読不能〕なり

庭巣庭籠の図

一 庭籠諸鳥飼大なる籠ニ而〔判読不能〕なり
巣〔判読不能〕鳥も巣離れ〔判読不能〕なり
一 庭籠ハ南の方ニむ〔判読不能〕別して〔判読不能〕なとも
囀らし年中庭籠へ入〔判読不能〕南向〔判読不能〕し

一 巣掛庭籠ハ〔判読不能〕庭籠〔判読不能〕なし
〔判読不能〕巣の〔判読不能〕掛ケ〔判読不能〕掛て
〔判読不能〕庭籠の内を掃除〔判読不能〕し
但庭籠ハ内掃除〔判読不能〕なし
〔判読不能〕二〔判読不能〕
〔判読不能〕なり
一 庭籠ハ諸鳥〔判読不能〕
飼〔判読不能〕多し〔判読不能〕葉〔判読不能〕の〔判読不能〕葉〔判読不能〕
〔判読不能〕ハ人参〔判読不能〕なり
一 和鳥庭籠〔判読不能〕又ハ嵐〔判読不能〕
〔判読不能〕ハ諸鳥〔判読不能〕飼〔判読不能〕死なり

国立国会図書館　　タイトル『諸鳥定飼集 2巻』　請求記号 859-25
ガラス使用

文鳥の事

一 黄觜の赤味色強きものよしと白く赤味少く
事何れも右記し養法の事

諸鳥恵葉

右の類之文人参赤き生ほどよし
又入の右は相同じ
雛子飼の鳥の事

一 十姉妹 同じく 長生鳩 錦鶉右之類
鳥子ハ何も先外鳥と同じ
但さ法ハ卑しく胡方の黄はへに
其上雛子は庭籠の内は人参を以て入を

清香加之

一 雛子より飼の鳥は杉子ハ先へ熟合わせ候て前に記候とも
庭籠より出し前ち先にて取りて候ひて狗なと
おくれなる目をかけ候なり

鳩鶉之事

一 此鳥ハ餌の摺加減能く鳥とちかひ申候に付て
焼にて之義 此鳥は年中右の通り水へ入る事
但し右の餌と合せて候つかひて莫迄へなしけれ
申し候餌も粟其外米粉合之又は鳥 餌の黄へ
其余の分も用ひ候へ餌を能く合すへし
草ハ年しれて餌木へ所へ入れしかるへきなり

まらかん黄鳥　珊瑚　ヒイチイ　文鳥鶸のるい

一　椋鳥の事

鶯も諸鳥と違ひ餌を専ら蜜柑ばかり与へ餌の類
うぎんめしゆるべし

右鳥荒き性なれば餌の類ぶどうぎん青めんのごとく
以猶也る外鳥は和鳥尾長子雀餌のほうげん
やまもりねわ足以て飼べし

一　猶餌を持鳥の事

一　文鳥　多んがく　長鳩

鶯も似た事多分是は先へ定しあるなり
右の右は由ことあらく可なし

一　同薬法

とうがらし水にて水銀蠟黄おし用るべし
右一ヶ月用目なし

一　諸鳥餌の養作割次第の事

和鳥尾長鳥諸鳥やとも小野まで胡麻者は
餌食におりおりのま伝て胡麻時分によりては餌を細
べし暑中寒中には割る外餌おもくれなくは
其鳥の痛になるものなり
諸鳥昔日見る能見て乳を求める

一　諸鳥　惣薬　第病

右く乾用ニ可よし

一　又法

一　黄金丹弐分　製法甘草三分
右水ニ而煎し飼ふべし
但万金丹　製法甘草よくと葉研
よく搗用申べし

一　春の内湯之事
諸鳥共ニ冬の鳥ハ内を付候（成事之）也んすも
出来もよし湯ノ中ニ而なく鳥を
諸鳥共菓書なりしく妙にして書實ハうら
其紀通てなり血かん八橋鶉ら是ニ湯なくば
し鳥湯中下餌など仕候て鳥ノ中ニ内思ひ奉候

ハ下餌を仕ふべし又夕方鳥用ノ時分も餌の
喰ぶかん多少ニも内付候如なる時も鳥ノ心を
つけ餌もかげんあるべし
但し前ニも申ス通り諸鳥共ノ餌ハ不足無之
又中ニ今少し鳥によりし下餌乃外かげん
あるべし　都而何れノ鳥ニも寒くなり候ふとき
なり又若あし飼時下餌かげんしるべし
まうくぬものなり

一　諸鳥早鳴仕掛ケ
鶯の早鳴仕掛れ其の書ニ細にし鶯室中ニ
啼かたよふ鶯のめく類白赤鶸抔仕る

何を帯となすハ何鳥によらす鶯のことく其個
事なれハ帝帯なるものなり

一 頬白附子仕様

当年の子ハ秋口より親鳥に付る事なり四月より分
け候て親鳥の帯をまねさせる事なり夜寒一日陽
半日程ツゝ出し其後又附子にして附子候へ
候りなるものなり

但親鳥の方をも寄て附子にかけ候へ
いれ候てを付て親鳥の声へなるへく
其之声帝に仕切候へ何も同し
是よりなるへく其親鳥ハ外の其之

其之鶯とちかひ頬白親子付る
ものゝ其外の仕様なし

一 秋乃風の文

一 秋の夜風 涼風ハ諸鳥へ不当相当て
鶉色なる鳥ハ別して事より事なり相書
うつる事ハ外の鳥へ入置候へし

但秋風涼しき夜を嫌ふ中实ハ諸鳥共
抑夜なり抑鳥ハ諸鳥も大抵の鳥も病後
故嫌ふ事なり

一 夏鳥ハ春の鳥の事とも外へ出なり
物鶯の事鳥此文

一 諸鳥等鶉なども籠又ハ抱籠なとに入て飼
時ハ粉にて鳥をひたし餌にするなり ほかに
しくしかし鶉など籠ハ別籠餌のごとくにて
飼べし鶯ハ餌ハ何れもねりぬむき餌也

一 水鳥類の事

水鳥類ハ池中などへ別に川藻など飼てよし
亦稗餌にて飼ハ粟稗三分ほどの割一体気
なし又飼べし体気よし稗なとに粟ぐさある
中へ魚の肉なと刻て海老のなかにて海老
など加へよし

一 諸鳥餌入の事

諸鳥ともに餌入餌入に入て籠の内に用るなし
又ハ水入に入て籠戸ハ籠戸ハ大きくも用いる
様に籠の大きさに用ゆべし

但諸鳥とも摺餌足へ請にてなとハ何鳥
足気をも鳥類にハ別る何鳥かなとかす
餌入ハ餌なとを入て入れ置くべし
餌入足などの入る物なり
其の餌入にてもよく其籠をと鳥の大きさのよふに付
置べし亦籠戸ハ餌入の籠の籠の口角
の方へ餌入に二ツ三ツも入て置べし
但餌入と斗りといふハ此鳥籠のことし

一 諸鳥に年中餌飼ふ事

正月比は胡摺る餌を新しく拵置し諸鳥の餌なり又九月比迄右のごとくしつらふべし
諸鳥共に摺餌十月中比は粉餌を晩摺置きて明朝与ふべし其後諸鳥の餌前よりも右のごとく正月末比迄段々に与ふべし必ず手順を又毎朝摺なる和米

一 諸鳥尾羽抜換り候時の事

諸鳥共尾羽抜かはらば其時は鳥をおさへ照見出し羽新に生ずる迄青物掛し与ふべし
照事あるをも先ず謹む

一 諸鳥拵方悪敷餌喰なき時の事

諸鳥共拵方悪敷時は鳥々黒焼にても薬餌を与ふべし又は肉類にて鳥大豆之粉採の迄餌のよくとくさての鳥は拵方良く追日擂餌に加へ餌青菜なとにて

但餌喰悪敷時は大根の青ぢりけ汁吸はすべし
又大根葉青菜餌をすり与へ方割るべし
大根は肉をよく青つけすものなり

一 荒鳥の事

諸鳥共荒鳥は日向より目をあけびびすれば静なるなるべく若ならば足にて吹けば彼は用出かくべつ

鳥籠に入置事也

一 蚊を防事

諸鳥共蚊ニ責られ候時ハ蚊帳中ニ入置べし
なき時ハ蚊遣にて鳥ハ蚊防べし 又鳥目など出来る
もとになる事也

一 冬寒氣を防鳥の事

冬ハ寒氣を防ぐ鳥類ハ和鳥唐鳥共ニ籠を囲
まで天日ニあてよし 尤終日長く日ニあてゝ
悪し 寒内ハ出輪を置鳥類ハ別て綿なりとも巻て
鳥を入籠の障子ゆへし 忘れても入籠々ハ和鳥ハ
悪ク 小さき切せんかう目細き又美林郭ニ而

大瑠璃ハ唐鳥ハ文鳥 其外雀類別て和鳥の諸鳥
ともよし

一 和鳥唐鳥 粒餌の類 諸鳥

一 餌飼之事

文鳥類ハ粟稗黍粒餌の諸鳥ハ黄粟
練餌など與へ事故何迄て細葉等入レ候
年中絶さし 暑中ハ別て絹綿 又日有る
つよし

但文鳥類の鳥ハ常住々々有の故多く々々
葉類ニハ常ハ菜等を與へ菜を入る
事も候て細葉等あみ與へ中ずつの

餌ハ葦を嫌ふゆへ飼へ入る也 鶉も粒
餌よく飼候ハゝ鶉同し葦を細くかけ而飼ハゝ一ハ
やん律あるへし

一 惣而粒餌飼ひよく喰ひかね鳥の諸鳥ハ飲三四分の餡
餌よし為飼之也 鳥を上候し 文山雀 四十雀 鶸類
ハ野菜粒餌も喰ひ安所使ふやうなし すこしも
喰ひやすき物の粟少し 鶯ハ摺餌なり

一 諸鳥下餌上ケる事
諸鳥共引摺中又ハ粒子何にても下餌を多くも不飼上
添ハ候し 一試分宛上候し 不十分ならハ
日ニ一分宛上へし 一度ニ上ケ一度ハ下餌を下ケ

一 何事も気を付るへし
和鳥類 巣子飼立の事
一 河原鶸 小ヶ切 頬白 黄ひはきの子
鶯志鶉鶺鴒 百舌鳥類 小瑠璃 大瑠璃 鷚
右の類ハ何れ鶯の餌ニ而飼立る也
一 ほう白類 雲雀 野鵐 駒鳥 赤髭
右の類ハ新る粟餌飲ミ餌に添へ巣子の餌ハ
飲ふ餌ニ而飼立る事ニ 巣子の餌ハ
余進ミ事なり
一 巣子の内餌細かに黄色一 粟一ッ 一日 宛 大凡
一度餌 志餌一日ニ度喰ひ候と事ニやんる類

ものなり　其書ハ去を捨べし

一 摺餌少し溜くなり中々籠ハの先へ餌をつけ
手飼ハ度毎よく飼ふ事なり

一 粉根ハ鳥籠ハ籠へ移しかへて空餌ニ去る事
籠え移し洗ひのためへ餌をつけ其籠の外から籠の
先へ餌をやりて鳥を喰ふやうにすべし

雀類の鳥之事

一 鷽　山雀　四十雀　五十雀　ひがら　何せん雀
小雀

右ハ類鳥多く粒餌の内より出る哉
何も米なぞと其好喰ものにて亦鳥ハ甚寒き也ならず

右鳥ニも其好むものなり

一 鶸の事

鶸ハ荏中ハ摺餌ニて飼ふ事甚よし　荏を早く
掛て摺餌ニて飼ハ文鳥類鶸類なりしハ
荏中ハ二つ三つ鶸丸の餌ニて飼ふべし

一 粒餌類の鳥ハ何鳥でも長く飼ふにハ摺餌ニ
して飼ふべし　粒餌にてハ長く不持ものなり

但し粒餌の鳥ハ当歳など籠へ入れ飼ふ事
多く出来の折よりして通粒餌にて飼ひて
何鳥ニ而も年中黒く細く菜餌を加へて当歳
より年中長く持なり

国立国会図書館　タイトル『諸鳥定飼集 2巻』 請求記号 859-25
ガラス使用

一　鶉あつ鳥類掛中也除並
毛下り起米し事

一　ほうね　葉義式　小さし切　目細　せん成り

時鳥類
右之類何れも皆よく米類之飛角何鳥も掛籠かくよろしき
なる鳥ハ掛中後ヘ摺餌少しげん掛際二四ツほどよし
掛中の通りにて　細かし　摺済候しく目掛る
下餌を下さし　甚以外の方よし

鳥の形にて飼様改之事

一　和鳥唐鳥諸鳥共に其鳥の形に寄り餌ぞせん丸細か通
有り　唐へハ和鳥とも以て　訳ら頭思白類ハ　嘴細く　諸り

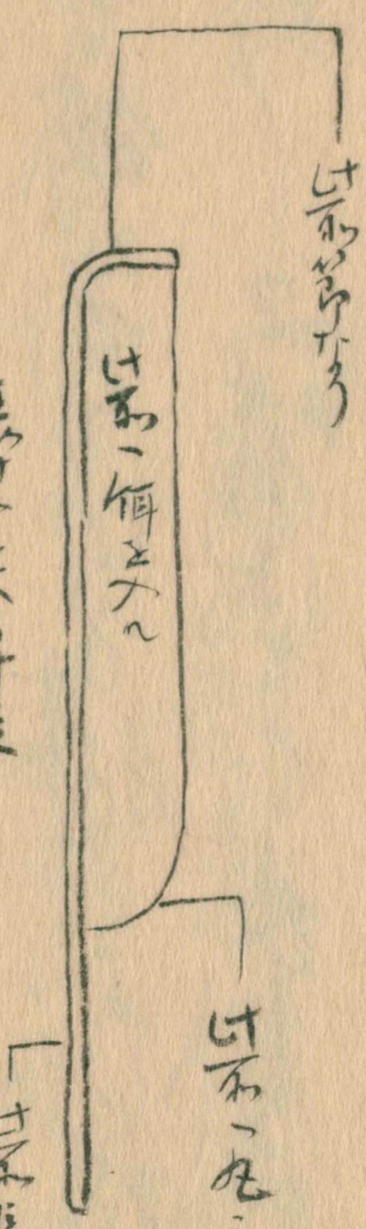
く形なり　先ハ諸鳥ともに野にて餌を好むをひたすらに
依りし飲之思ふ位に飼ふよし　様に何れも遠でも宜しく
心得べし　又嘴はそく長き鳥類は虫好と心得べし
赤鳥形にて小き羽根と脚嘴と細く長きハ摺餌
好むべし　右飼へも心にて　鳥ハちぶせんにて
記す我ら類迄　目高し　飼にも何れ宜しからん
其んの心得　右のめく　何事掛中鳥を入れ置る
りにても飼方不定にて小事なり

割餌の仕方

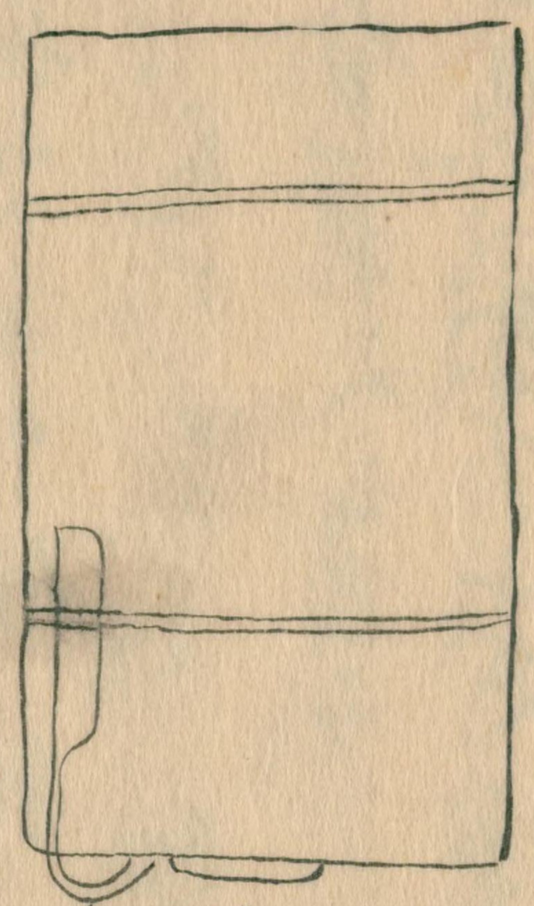
一　割餌と云ハ粟今迄の荒餌を餌摺り通すり餌を
いれし餌の上へ掛り汁ハ壌二ツ並べし　鶉類にハ切

一
細く切竹を用ゆる時は是まてなく含せ飼事也
割餌竹と云は擂り餌竹の切口を五寸程の斜
にそぎ割りて其中に擂餌を入れ籠の上へ掛置也
赤腹などの如く小き鳥の籠へ入れて是を
籠の外子の口へ竹を差入て割餌竹へ擂餌を
付置きてかふべし

割餌竹乃図



同籠へ付掛けの図



和漢諸鳥口伝之書 終

一　番雛飼鳥拵様之事

ちゞね
塩さゞね　ミ部　下餌串鍾

宍餌鍾ニして八分餌之掛合なれバ此人右分餌ヲ
よく手を懸此人のごとく雛を育り細抹して下餌ハ常之
擂り其上ニ而下餌と擂まで用る切餞之事　此を
お能ハ右之文を考りて一羽分の餌ニ気を遣ひ
つゝも念を用て文を思ぶり可なとも用べくとし
作し一日ニ一度ヅゝ十匙程づゝ其日の餌ニ當餌を可
飼育よし

一　冬ハ二ケ月ゞかゝる迄二ハ三ハ雛飼しあり可常
其ゞ又ハ吹冬至より見合然し五日過ても冬ハ至てゝ
より猶ハ　日を移し寒より拵まで南風ニ
當り事せんとて前之子細を申ハ朝之冷ニ
南風ハ暖気也陽気冷しく夜を掛さく
毛除く無之義など冷風ハ冷しく時として
風なきみてる事見れ有事ほり巣振る故て
掛合之事雛の外ハ冷出し大方ハ冷し雛来
ものなる雨降る南風ハ前に移して気候れ常ニ熟
寒中なとハ風ニあたり不過　然かとなど當るを申
も寒の咲春中をみて當たらバよろし　如く可ならば

国立国会図書館　タイトル『諸鳥定飼集 2巻』 請求記号 859-25

ガラス使用

一 定飼鶯ニ而ハ不飼初秋之比一羽ツヽ入置て一夜の
内ニ入候也

一 擂餌を与へ候ハヽ定飼ニ而ハ鳴候事ニ而飼ニいたし候ハヽ宜
但年若鳥鳴せへく鳴らすへき也

一 網掛之鳥ハ生之の通り鳴らす也

一 定中ニ而鳴出之の通り定中ハ隠ニ而隠なるへく事ニ而毎日
昼者日小鳥ニ事

一 擂餌ニ而善悪粉ニ而鶯ニ而ハ不好事と放飼など
是又鳥好事も隠し羽中事ニ而もいなこハ好る
ものにて是まて隠し屋ニ而かへ能き候ニ而為
右御覧之上御論議被仰付事

右の鳥の良ハ澄声抜群ハ格別大丈夫ニ而取一切
鳥を活かるなと雑 隠し入置べき申候文

菊戴之部

下飼治定申候
米 粉
擂 米 五〆
五〆

一 定飼鶯ニ而鳴候節ハ飼候 定式鳥之事ニ而治定
ハ鳥ハ鳴候鳥ニ而飼候擂餌いたし候ハヽ宜
候ニ付一度入用之掛ニハ掛中定中ニ而も飼ハ
定之飼之一切ニ鳥を治定ニ而擂ニ而いたし申へ
是ハ掛ニ而隠し候ても能て不雑ニ而之鳥
隠しハ鳥ニ而黒事擂鳥ニ而鳥宜かす
是又人定席不ニ而宜定中 擂ハ別る其相応

郭公と郭

郭公と郭

一
寒中音を出さする事 餌拵而分ハつよく四分ニ致
何鳥も生餌ハ分量を用ひ候 生餌ハ余り大食
なるハよろしからず小虫餌よろしく 其外の世話にて
四五日あかり餌を先のことく拵へ給すれハ十日程の内ニハ
音出し申なり

一
世間にてハ諸鳥共以て拵る事 相互ニ見合候
未々ニ二三月比ハ分気を付 余り強き風抔あたり
候ハ悪し 菊戴などハ 世間にて惣を留る

但 黄ひしん 佛法僧 ひわり
鶯返り 大瑠璃 小瑠璃
此鳥類ハ都て生餌を遣し生餌之飼方ハ二段有なり

一
新来鳥
擂餌鳥
小鳥之類 三部 下餌鉄粉
小隼ため
野山渡

定餌飼之ハ六分餌掛粉分掛中ニ定餌を拵
七分餌ニ揚る事 其掛中ニ麁く先のことく 拵る事
但し鳥形常格好なる所ハ八重咲より 一切生餌
常様の内ニ 掛試進ハ鳥小鳥類抔足気ハ 拵て
安来掛り掛し 置て足位ニ給し候事 是ハ大内
白鶺鴒ハ三分餌 四分餌にて 不苦 其心得ニ候と

二 九鳥乃部

国立国会図書館　タイトル『諸鳥定飼集 2巻』 請求記号 859-25

ガラス使用

一 目白ハ飼しよりして長持致し候へ共とかく手数も
掛り候得ハ是非擂餌にて飼可然夏ハ諸鳥ニ
大に過る事也 かうかんにて水ハ度々可入
水ハ鉢に入置中にて浴候様ニ致す事

大瑠璃之部　下餌鳥

定餌ハ宮城野ニて五分餌擂鉢にて定餌ニ入揚
七分餌之擂鉢にてよくかくて能々する也 又上餌ハ白大豆
よく浸し米を浸し是を能度々擂て多く
すくい板に入擂鉢にて定餌を汚さぬ様にし
水抔ても是又度々かへよく大切にしてかへ
何分商人にも

糸飼もに一日中擂ハ別ニ々にて温湯にて相用
すの子逢ふて是又自然とあらくして
少しも入れ水引能つぎめ様
いたし候事肝要

鶯之部　并附子

下餌鉢の粉
附粉下餌鶯下餌

定餌鉢の事六分餌にして擂鉢分擂鉢 定中定餌
足分揚七分餌之擂鉢にて能々とくよく事
擂鉢至極能風へもよくかハ擂鉢別ニ
風度々擂鉢を
随分二三日事擂揚候
二日ニ一度ツゝよく文

国立国会図書館　タイトル『諸鳥定飼集 2巻』 請求記号 859-25

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『諸鳥定飼集 2巻』 請求記号 859-25

ガラス使用

一 定飼鉄行候の鳥共ハ鉄なく白餌にて少々宜
しく餌の上へ其鳥の好む虫を少く付なり

一 定飼ハ何の鳥も惣して鳥の品別なく鍾等分の
白餌なり右餌の上へ其鳥の好むしを宜しく

一 餌付の鳥は二日も三日も間を少々宛餌を青きを入
沢山にして餌を惜く餌之其鳥の内ハ
よき餌なり

一 諸鳥共其鳥の内ハさんばうへ入置静かなる所へ置

一 諸鳥共に何も餌付ハ其時節の品々品別なく見合て致
然し其後鳥此らハ又は右にて捕取候所にて致し
其毛なく候得ば鳥籠別静かなる所へ置事

一 水鳥共ハ百舌鳥共ハ餌付之口伝有り此者共の
鷺池構の塩気を餌共有り其中へ入置候て是を取
其外の肉餌を大概皆入て構中へ入置候て其方へ
しと鳥寄付其のまま餌付くものなり

一 鳶鳥共鷹類共ハ夕方中へ入時分多く飯
を入て足割いたし其上にて初て小鳥之餌一品

一 度ハ尾ハ又宜飼

一 粒餌の鳥共ハいづれも其鳥の内思ひ及一思共に
雉鳥共ハ何れも塩気を入て鳥ハ其餌を一面に摘捨て
外なり

右諸鳥共口伝の書ハ認め置候得共秘事

国立国会図書館　タイトル『諸鳥定飼集 2巻』 請求記号 859-25
ガラス使用

悉新ニ紙之一書となすもの也

和漢諸鳥飼之

諸鳥擂餌加減之事　廣保方著法

諸鳥ニ擂餌拵へ候ハ、先菜を湯ニ擂薑と又ハ下餌
粉合湯をねむる事のおくまで擂かげん餌拵のせ
米し粉入調合致侍ゆる宜を云鶉軟九官黄鳥
なと乃ゑくなる常ニ餌の付くを嫌ひ鳥を少候の
ゑかげんよろしよ事と鳥ニ合粉合を嗜る餌の
付不申少拵ニかげんいたし申事　菜粉の分る擂る
甚ろく下餌、粉合、拵づり事あり少と擂ニ中よろしくは
米し粉入る擂つは米の細むらもあ、或は諸鳥先不申迄の

中る迄粉合拵づりけのか取擂調合致中る事
保険餌の拵く交合せらいて餌と米し粉と分ケ治り
中ていよろしかずに、世に候分出合より粉ニ
調合候事中、一書ニ候あるに、拵餌へ菜餌拵けて
なせと擂交て先ニ下餌分ニて作を擂を上下餌球
へ擂交る事但し安ニ致ても何にても米ハ山入
擂餌の色の強く出候る事なれは甚よろしからぬは
ある、大根の菜ニ擂り青菜なども急度ひく事
大根の菜ハ擂別内をすりくしく青菜も定
にて鳥の餌拵ニハ定式調味致しなゆく
大根をそひくもとひら葉陰草ハ甚気の悪し餌の

国立国会図書館　タイトル『諸鳥定飼集 2巻』 請求記号 859-25
ガラス使用

諸鳥定飼集 二巻

一 水浴作事

諸鳥共二月より箇分 定法網の色かはりを云也
もし充分羽毛揃て水浴の定法網して餌成次第に
水浴をさせ早くすれば何分よく色かはり水浴共
せすの内目出度水浴させ定法居より藻網して心よく
水浴させ黒気して色付出すれば外気へ出すべし 至極
ましかに雑毛落しかけざれば是五日定法にて
噂水はせず中に出し善き〱別して水浴させ
噂水浴して直に色落して色付申すの分も平日余程
あびる時も鳥へ大に騒ぎこれあり申し候の節は
其餌も甚く共早く湯にて聞かせ申し候へ共分いたし

右様生れつき色付日影など究同様餌飼朱にても
飛して其大成長させて年に病ひ又大鳥にして最
早老人病等ものゝ又は清水見舞大まで是
療治をして鳥の餌不の事なり

859
25

国立国会図書館　　タイトル『諸鳥定飼集 2巻』 請求記号 859-25

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『諸鳥定飼集 2巻』 請求記号 859-25

ガラス使用